

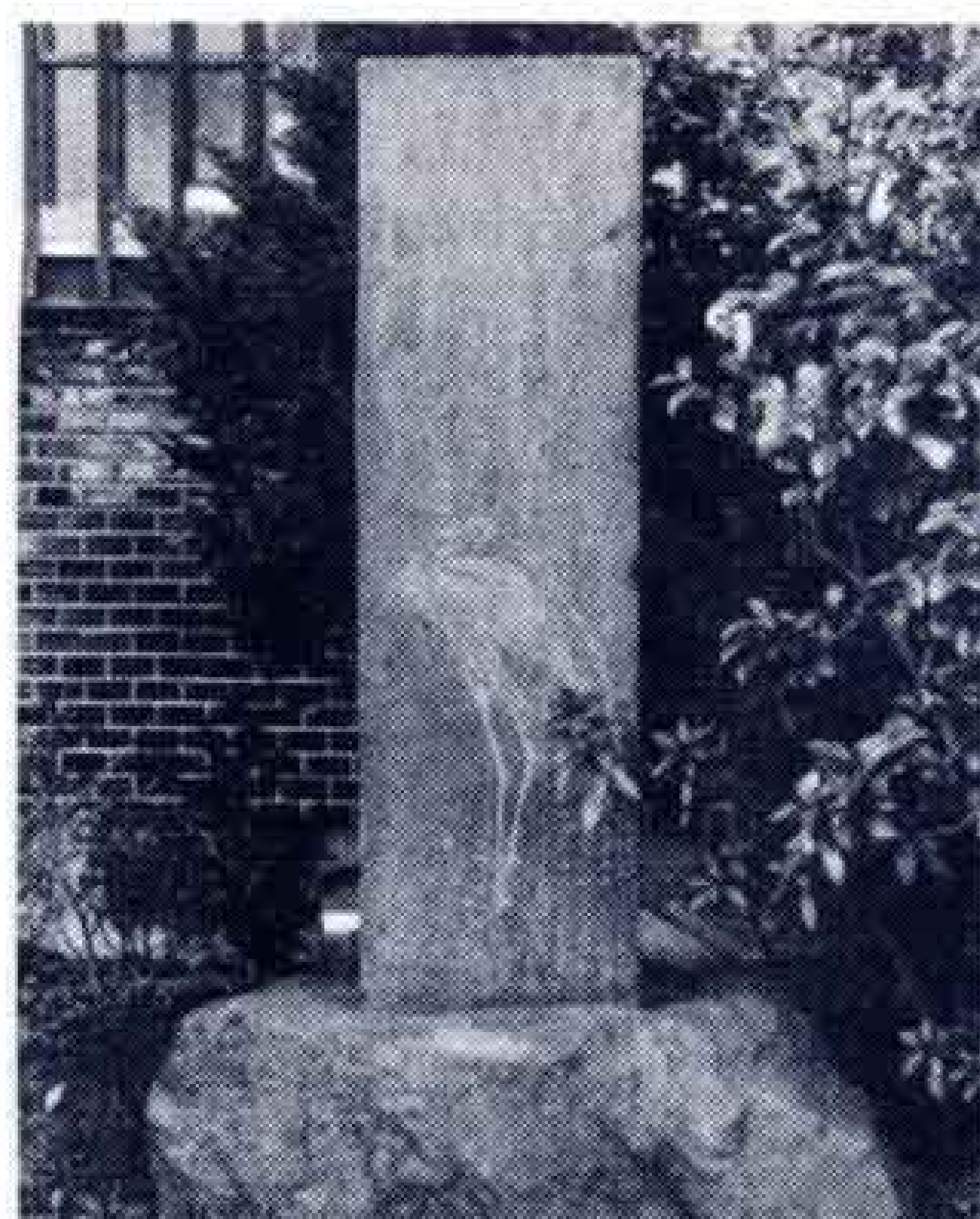
ふるさとの昔話

本市場に伝わる

つる ちや や 鶴の茶屋



板倉茂三郎さん(76歳)
(本市場)



鶴の茶屋跡の碑

語ってくれた人

板倉さんは、神社仏閣の建築彫刻師としてこの道60年。今も元気に制作にはげんでいます。号を聖峰とい、市立博物館には役の行者像のすぐれた作品が展示されています。

そうさなあ、わしがこの本市場に住んでもう50年になる。それにしてもずい分と変わったもんだ。今は国道を自動車がひっきりなしに走っているが、わしが若い頃は、荷を運ぶのに大八車を引いたもんだ。そうそう、鉄道馬車がここを通っていたな。

その頃聞いた昔話しなんだが…。
ここ本市場は、東海道五十三次の吉原宿と蒲原宿の合いの宿だった。甘酒やうなぎの蒲焼が名物だったそう、茶屋は結構繁盛しておったということだ。

その茶屋に座って富士山の中腹を望むと、林の間に芝生が見えて、夏は青く、冬は白雪に輝き、その形は一つは鶴が舞っているようで、一つ

は亀が泳ぐように見えたので、鶴芝亀芝とって、旅行く人は非常に珍らしがったということだ。

そうしたことから、誰いうことなく、この茶屋を「鶴の茶屋」というようになったそうだ。

ま、今ではそうした話しを知っている人も少なくなってしまうような感じで、どうもめまぐるしい時代になったもんだなあ……。

この欄で昔話を語ってくれるお年寄りを探しています。
あの人を知っていそうだという情報でも可。連絡先は市役所広報広聴課☎51-0123(内線528)



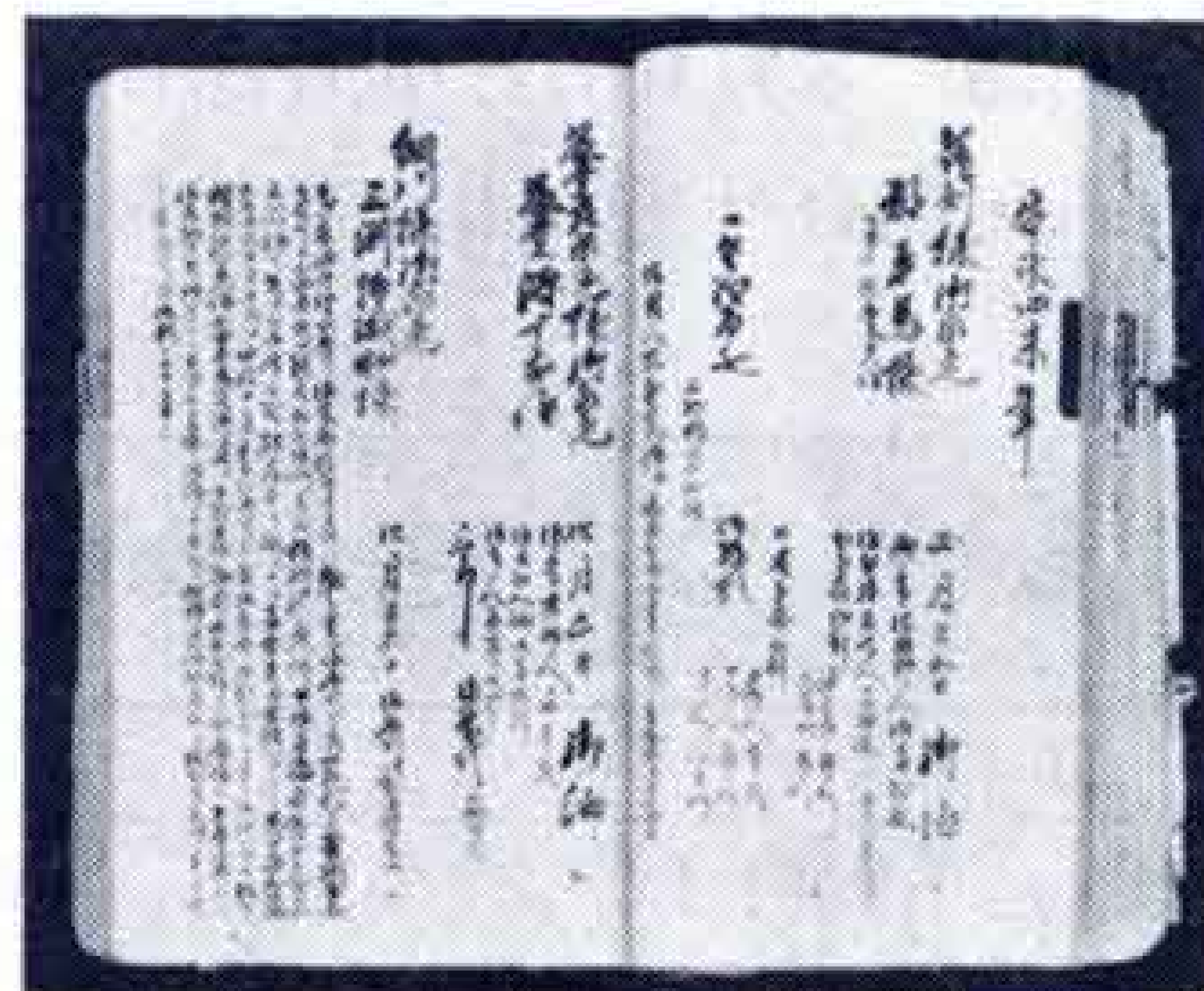
富士市内の各家庭から出される燃せるごみの中には平均52.5%の紙類が含まれています。東京都と比較すると約1.15倍も多くなっています。

ごみとして出された紙類の中には、包装紙・書籍紙・段ボール紙が多く混じっています。これらの紙類は、立派に再生利用できるものです。町内会、婦人会、PTA、老人クラブ、子ども会などで定期的に回収することにより、資源再利用すると共に地域ぐるみの連帯の輪も広がります。

一すすめよう ごみの減量・資源化一

市立博物館 展示物 紹介

宿場資料 2点



脇本陣宿泊帳

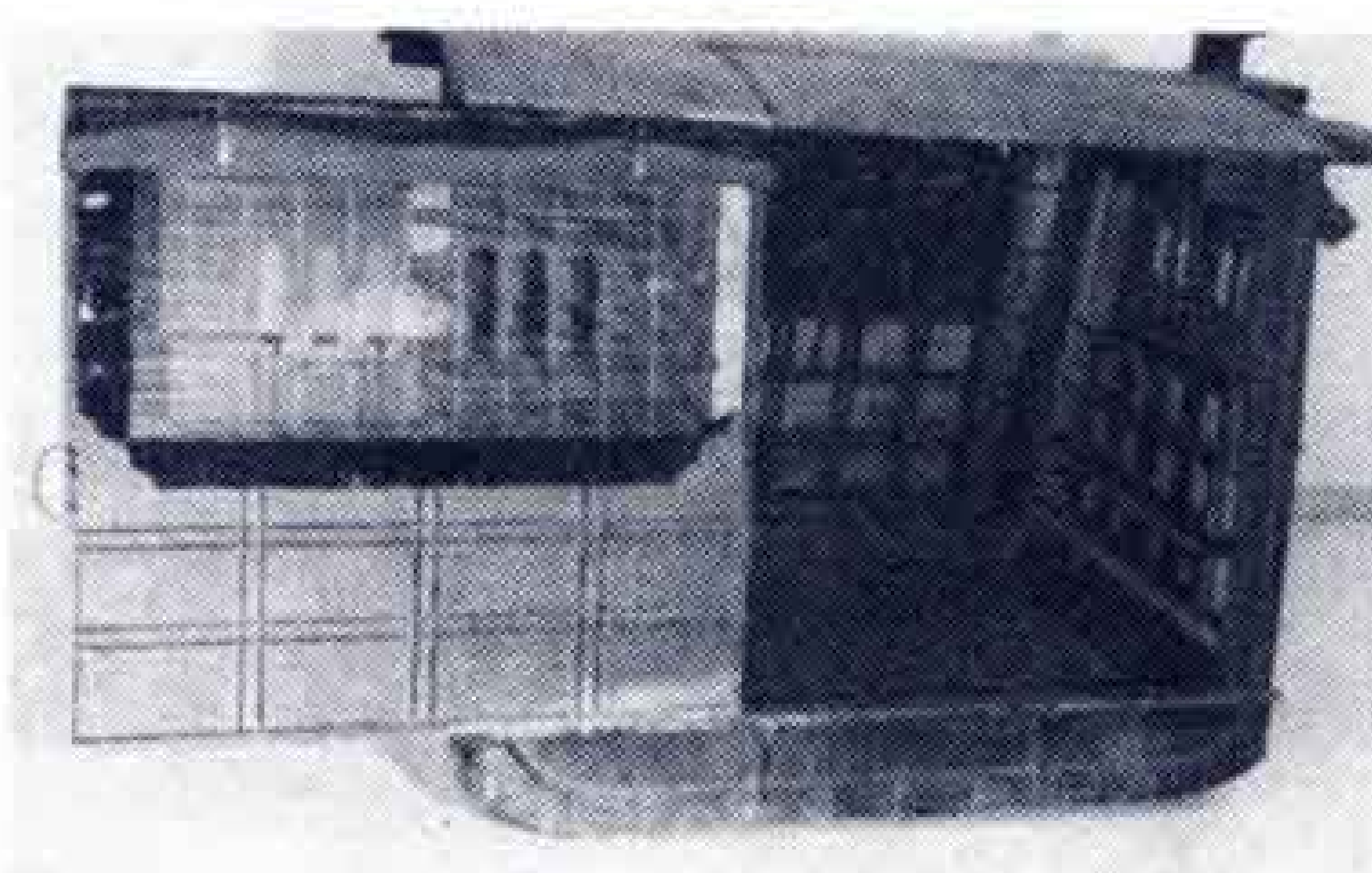
吉原宿のうつりかわり

鎌倉時代のはじめ、砂山の湊寄りに見付が構えられ、長い間旅人を船で渡していました。

しかし、漂砂や高波の被害が多かったため、天文年間(1532年～1554年)に今井・鈴川地区へ所替えしました。そして慶長6年(1601年)幕府から吉原宿として指定されました。

これが、のちの元吉原宿です。ところが、寛永16年(1639年)に前と同じ理由で、また所替えしたのです。

それは、依田橋村の西方でした。これが中吉原宿です。しかし、延宝8年(1680年)8月6日の大津波の被害で、またもや今の吉原商店街の位置に所替えしました。江戸時代の新吉原宿は東海道五十三次の宿場町として旅人でにぎわいました。



道中駕籠